

『愛寵皇子 -征服王に囚われて-』

著：秋山みち花

ill：蓮川 愛

「侑李だ。おまえら、少し場所を空けろ」

レオニダスにそう声をかけられて、隣を占めていた獅子がのっそりと後ろに下がる。前に寝そべっていた虎も、侑李のために道を空けるかのように両脇へと動いた。

「こっちに来て座れ」

レオニダスが示したのは、石造りの長椅子だった。

侑李はこくりと喉を上下させて、隣に腰を下ろした。

猛獣は十頭以上いる。獅子と虎、黒い豹、それに真っ白な毛並みに黒の斑点が浮き出た美しい豹もいた。

「これは、あなたが飼っているのですか？」

侑李は喉をひりつかせながら、怖々問いかけた。

「いや、飼っているわけではない。こいつらは、何が気に入ったのか、俺についてまわるようになっただけだ。一番の古株はその獅子だ」

レオニダスはそう言って、ふさふさの鬣を持つ獅子の背中を撫でる。

「ついてきた？」

「ああ、そうだ。こいつとはファルミオンの闘技場で出会った。他の連中は東への移動中に、徐々に増えたんだ。戦象の中にもついてこようとしたやつがいたが、さすがに帰らせた」

なんともいい加減な言い様に、侑李は我知らずレオニダスを睨みつけた。

ファルミオンの王は、擦り寄ってくる猛獣たちを順に撫でてやっている。

獅子の次は黒豹、虎、雪豹……種族が違うはずなのに、猛獣たちは喧嘩もしない。

目の当たりにした奇行に、侑李は呆れるだけだった。

しばらくして、レオニダスがふいに視線を合わせてくる。

間近からじっと顔を覗き込まれ、何故か心の臓が高鳴った。

「やつれたな」

「別にそんなことは……」

「ずっと食事を取っていないと聞いたが？」

さらりと問われたことに、侑李は目を見開いた。

まさか、レオニダスが捕虜の動向を気にしているとは思わなかったのだ。

「気に入らないな」

レオニダスは、不機嫌そうに精悍な顔をしかめる。

ぐいっと顎をつかまれて、さらにまじまじと顔を覗き込まれた。

「離して、もらえませんか？」

侑李は辛うじて文句を言った。

レオニダスの目が怒りのせいか金色に染まっている。

わけもなく震えそうになって、情けない自分自身に腹が立った。

「おまえ、死にたいのか？」

単的に訊ねられ、侑李は思わず頷きそうになった。

しかし、すんでのところまで衝動を抑える。

「それは私が決めることではない」

「ふん、そうか。食事を絶って、飢え死にするつもりかと思ったが？」

「そんなことは……しない」

誘惑に駆られたことは事実だが、侑李は懸命に否定した。

レオニダスはその答えを聞いて、ようやく手を離す。

侑李は居心地が悪くなり、自然と視線を落とした。

捕虜としての屈辱に甘んじるのはいやだ。早く処刑してほしい。

そう口にしてしまいそうになるのを、なんとか堪える。

今さらこの男に頼み事をするような真似はしたくない。

「侑李、おまえは鐘国の太子候補だと言っていたが」

緊張が続いていたなかで、レオニダスがふいに話題を変えてくる。

「前にも言ったと思うが、私を捕らえておいても、たいして益はない。太子候補は他にも大勢いる」

「では、おまえは自由というわけだ」

「自由？」

いったいなんのことだと、侑李は再びレオニダスへと視線を向けた。

奴隷上がりだというファルミオン王は、本当につかみどころがない。何を考えているのか、侑李には知る術がなかった。

「提案がある」

「提案？」

侑李は小首を傾げてくり返した。

レオニダスは何故か、ふいに口元をゆるめた。そして鋭かった金の眼差しもやわらぐ。

「おまえ、俺の部下にならないか？」

「は？」

とっさには何を言われたのかわからなかった。

レオニダスは苛立たしげに眉根を寄せる。

「俺に仕える気はないかと訊いている」

レオニダスはそうくり返したが、侑李は混乱するばかりだった。

「どういう意味ですか？ 奴婢にするというなら、勝手になさればいい。今さら逆らったりはしません」

言ったとたん、レオニダスはさらに怒りを見せる。

「馬鹿か！ 誰がおまえを奴隷にするとした？」

「私には人質としての価値がない。ゆえに、処刑か、さもなければ奴隷の身分に墮とすのが順当なところ。あなたが何を言いたいのか、私にはわかりません」

「おまえはそんなに処刑されたいのか？」

叩きつけるように問われ、侑李は沸々と怒りにとらわれた。

さっさと殺してほしい。

そう頼めたなら、どんなによかったか。

けれども最後のところで、その言葉をのみ込んだ。

「私に自裁を禁じたのは、あなたでしょう。私は負けた。だから、あなたの好きなようになさればいい。だが、配下になれとの甘言に乗るつもりはない。そして、私からあなたに何かを頼むこともない」

侑李はじっとレオニダスの目を見つめて言い切った。

捕虜としておめおめ生き延びるよりも、処刑されたほうがまし。将として最低限の責も果たした。ゆえに思い残すこともない。

でも、そう口にすれば、さらに負けを重ねることになるだけだ。

レオニダスは眉間に皺を寄せ、刺すように見つめてくる。

咎めるような眼差しから視線をそらさないことだけが、侑李にできるすべてだった。

「口ではなんとでも言える。おまえはたいした嘘つきだな」

嘲笑うように言われ、侑李は眉をひそめた。

「なんのことですか？」

「ふん、おまえは都合よく忘れたようだが、天幕では俺の寝首を搔くつもりだっただろう」

「あ、あの時は……っ」

侑李はかっとなら顔を染めた。

天幕では確かにレオニダスを殺そうとした。言動が一致しないと咎められれば、恥じるしかなかった。

思わず視線をそらすと、レオニダスがふいにくぐもった笑い声を漏らす。

「くくくっ、やはり、ひと筋縄ではいかんか。いいだろう。おまえの望み、叶えてやろう」

「……………」

「おまえは敗軍の将らしく扱われたい。そうだろう？ 隠すことはない。正直に言え。これぐらいでは、俺に頼んだことにならん」

侑李は素直に頷いた。

レオニダスの言葉は的確で拒否する理由は見当たらない。

「鐘国の皇孫、朱侑李。おまえは俺に一騎打ちを仕掛けて敗れた。おまえの生殺与奪の権はすべて俺の手の内にある。それでいいんだな？」

雰囲気を一変させたレオニダスが問う。

侑李はこれにも、こくりと頷いた。

するとレオニダスがすっと立ち上がる。

「テオドロス、いるか？」

「はっ」

呼びかけに応じて姿を見せたのは、ここまで侑季を案内してきた側近だった。

猛獣を恐れることなく王の前に出て、さっと片膝をつく。

「テオドロス、この者を……………」

レオニダスはそのあと異国の言葉、おそらくファルミオン語で何かを命じている。

テオドロスと呼ばれた側近は、冷たい表情でちらりと視線を投げてる。

今になって、急に不安が芽生えてきた。

あっさり処刑を命じられるならいい。しかし、そんなに簡単に望みが叶うとは思えない。

「立て」

レオニダスに何事かを命じられた側近は、侑季に向かって短く命じた。

王との会見はこれで終わり。

この先は、虜囚らしく扱われるのだろう。

「ついてこい」

テオドロスはそう言って、庭園の小径を歩き出す。

大人しく従いながらも、侑季は後ろ髪を引かれるように振り返った。

レオニダスはもうこちらに注意を払うことなく、四阿から逆方向へと向かっていた。

獅子も虎も豹も、十頭以上いる猛獣たちは、邪魔者がいなくなって清々したとでも言いたげに、王に戯れかかっている。

獅子は率先して飛びかかり、レオニダスは逞しい四肢でそれを受け止める。勢い余って草地に転がり、そこへさらに他の猛獣たちも擦り寄っていく。

侑季は僅かな間、その奇跡のような光景を目に留めていただけだ。

けれども何故か、胸の奥が痛くなってくる。

あの中に自分も入りたい。

そんな衝動に駆られてしまったのだ。

でも、レオニダスはもう自分に目を向けることはない。

そうわかっていたからこそ、胸が痛かった。

+

庭園での謁見後、侑季の扱いは一変することとなった。

もとの部屋に戻されたまではよかったが、テオドロスが兵を呼び寄せたのだ。

「そやつの衣服を剥いで拘束せよ」

いっせいに飛びかかってきたのは、秦羅人の兵たちだ。

「な、何をする？」

侑李は憤然とテオドロスを睨みつけた。

「おまえは陛下に逆らった罪人。相応しい扱いをせよとのご命令だ」

テオドロスは冷たい表情で言い切った。

流暢な秦羅語で命じられた兵たちは、侑李から上衣を剥ぎ取って薄い下衣だけにする。

侑李は寝台へと追いやられ、そのあと後ろ手に縛られて、さらに鎖まで掛けられた。

「私をどうする気だ？」

恐怖を堪えて問いかけると、テオドロスは氷のように冷え切った灰色の目で見下ろしてくる。

「陛下はおまえを奴隷の身分にするとのことだ」

「奴隷……」

自ら望んだこととはいえ、侑李は呆然となった。

しかし何もかも自分で蒔いた種だ。侑李は惨めに拘束されながら、唇を噛みしめた。

「今までのような扱いは期待するな。陛下のご温情を無にしたのはおまえ自身だ」

テオドロスの冷えた言葉が耳に突き刺さる。

怒りがこもっているのは、敬愛するレオニダスに侑李が逆らったためだろう。

もとより覚悟は決まっている。

「わかりました。すべては王の思し召しのままに」

侑李は静かに答えることで、己の矜持を守った。

+

刻々と時が移ろい、あたりが夜の帳に覆われる。

寝台で拘束されたままでは、正直なところかなり堪えた。途中で一度食事を与えられたが、ほとんど喉をとおらなかった。

鎖での拘束は屈辱だが、これも自分で言い出したこと。だったら、最後まで醜く足掻くことはするまい。今さら情けを乞えば、レオニダスを喜ばせるだけだ。

そして夜半となって、そのレオニダスが姿を見せた。

逞しい体躯に紺色の夜着をまとい、極めてゆったりと構えている。

「いい格好だな。思ったとおり、おまえにはその姿がよく似合う」

「このような夜更けに虜囚の顔を見にこられるとは、ずいぶんと酔狂なことだ」

侑李は表情を変えず、冷やかに応じた。

内心では不安が増しているが、そんな顔は見せられない。

「やれやれだな。相変わらずすごい態度だ。ここは戦場ではない。少しは会話を楽しむ気になれるのか？」

寝台に腰を下ろしたレオニダスは、つまらなさそうに言う。

「なんの冗談ですか？ 長い時間この格好で放置されていたのだ。会話を楽しむ余裕などない」  
「今はまだ拘束を解く気はない。むしろ、拘束されていたほうが、おまえのためだと思うぞ。俺は徹底して楽しむつもりだからな」

「何をする……気だ」

「言っただろう。徹底して楽しむつもりだと。おまえの身はすでに俺のもの。どう扱おうと俺の勝手。この美しさ、おおいに愛でてやらねば損だろう」

侑李はぎくりと狼狽した。

レオニダスは唐突に接近してくる。拘束されて寝台に転がされている身では、レオニダスの手を避けようがなかった。

「なんの真似だ？ 美しい女はいくらでもいるだろう」

いやな予感に、侑李は必死に言い返した。

けれどもレオニダスからは冷笑を浴びせられただけだ。

「確かに、この宮殿にも女は山ほどいる。だが、おまえほど美しい女はいない」

レオニダスはおかしげに言いながら、手を伸ばしてきた。

首筋に触れられて、侑李はびくりとなった。

自分の命はレオニダスのもの。そう言う覚悟はできているが、この展開は想定外だ。

レオニダスの手は下肢に伸び、あろうことか、薄い衣の上から中心をそろりと撫でられる。

「くっ」

侑李は強く腰をよじり、足を曲げて傍若無人な手を打ち払った。

けれども、そんなささいな抵抗など通じるはずがない。

「くくくっ、さすがにいい動きだな」

レオニダスは上機嫌な様子で、侑李の身体を意味ありげに撫で回す。

「本当に、やめてくれないだろうか。私など抱いても仕方ないだろう。そういう行為は女性となせばよい」

「誰にでもなびく女には興味がない。相手にするなら、おまえがいい」

レオニダスは何を言っても止まることはなかった。

これもすべて自分から招いた結果だ。

だったら、毅然と受け入れるしかない。たとえ、処刑されるよりつらい行為であろうと、これ以上、同情を乞うような言葉も吐きたくない。

「私は敗軍の将。あなたに一騎打ちを申し込んで、……負けた。好きなようになさればよい。だが心まで屈したわけじゃないと覚えておかれよ」

侑李は屈辱にまみれつつも、声を絞り出した。

「いい覚悟だ。では、存分に可愛がってやろう」

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>